

## アクリルキーホルダーの増産体制を強化 同人誌市場で培った期待を裏切らないものづくりで市場拡大

高品質な同人誌印刷で知られる株式会社緑陽社は、同人誌ユーザーだけでなく、企業や団体などがオリジナルに創り出すグッズ製作にも力を入れている。グッズ事業部が中心となって、生産体制を強化し、グッズ作りのノウハウを活かすことで、多様なニーズに対応している。グッズ制作事業を担当している営業本部長の鈴木祥恭氏と営業支援部の加藤早苗氏に話を伺った。

### グッズ事業部の立ち上げへ

緑陽社では、同人誌印刷とグッズ制作事業の2つの事業に力を入れている。グッズ制作事業の拠点となっているのが国分営業所で、元は同社の本社だった。2006年（平成18年）に本社を府中へ移転した後、倉庫などで活用されていたが、2015年6月、グッズ事業部の立ち上げにあわせて国分寺営業所が開設された。

この時、導入されたのがインクジェットプリンタ1台とレーザー加工機1台で、本格的なグッズ製造の内製化が始まった。なお加藤氏は、グッズ事業部立ち上げ前から、同社のグッズ制作事業に携わってきた。小ロットでグッズ製造ができる企業や素材などの情報を集

めてカタログ化し、受注メニューに落とし込み、BtoCの市場に展開してきた。

現在、同社のグッズ製造を担っているのは、ミマキエンジニアリングのハイパフォーマンスフラットベットUVインクジェットプリンタ「UJF-7151 plus」2台と、レーザー加工機が3台。それに加えて、タオルなどの布素材に対応する昇華転写のシステムも設備。

グッズ事業部を設立した約5年半前から、グッズ製造用のインクジェットプリンタを導入していたが、品質重視の選択であり、当時はまだ品質と生産性を両立したシステムはなかった。「品質の良いものを届けたいという思いで40年間操業してきた会社です。作った人が満足する品質で届けたいという“高品質ブランド”の製造を可能にするために、スピードやコストよりも再現性や印刷品質を重視した選択でした」と当時を振り返る。しかし、大量受注などの時には協力会社に協力を得なければならず、相手企業との意思の疎通、品質管理の面などが大きな負担となっていた。

そうした中、出会ったのがミマキエンジニアリングの「UJF-7151 plus」である。「それまで使っていたシステムと比べて生産能力は4～5倍。解像度や印刷品質は肩を並べるものであり、“買



グッズ制作事業を担当している鈴木祥恭氏（左）と加藤早苗氏の似顔絵イラスト

いだな」と判断し、「UJF-7151 plus」1台とレーザー加工機1台を導入した。その後、従来機は全て撤去され、現在は「UJF-7151 plus」2台、レーザー加工機3台が稼働。今年4月中には、後継機の「UJF-7151 plus II」1台とレーザー加工機2台を増設する予定だ。

「UJF-7151 plus」は木材、樹脂、ガラス、金属など多様なメディアへの印刷が可能。薄いメディアだけでなく、153mm厚のメディアに対応。ホワイトインクの搭載や着弾精度を向上させたことで透明素材へのプリントの表裏の見当精度が向上している。

同社の「UJF-7151 plus」とレーザー加工で生産する98%が、アクリルキーホルダー、アクリルスタンドなどキャラクターグッズ商品である。アクリルキーホルダーの中でも、コスト・納期とも手頃な1枚もの（3mm）が85～90%を占めている一方で、2枚貼り合わせ



緑陽社の生産を支えているミマキエンジニアリングのUVインクジェットプリンタ「UJF-7151 plus」2台

たもの、白色の面にグリッター加工してアクリルを貼り合わせたもの、印刷後にポッティング加工（液状樹脂をのせて乾かしたもの）することで意匠性と耐擦過性を高めたもの、ホログラム加工（実用新案：スクエア／スター）など、アイテム数は30を超える。商品としては、スタンド型、キューブ、ペンスタンドなど独自の製品も開発している。

商品の多さは、BtoBの市場の中で偶発的に生まれてくる商材に頼るのではなく、商品開発も必要だとの考えから、社員や顧客から上がってくるアイデアを形にしている。新しい商品を創ることで、顧客のニーズに応えるだけでなく、新規開拓や既存顧客への新しい提案ツールにもなっているという。

## 同人誌から企業の市場へ

緑陽社がアクリルキーホルダーの生産を始めた頃は、同人誌の世界で爆発的ブームのタイミングでもあった。グッズ作りの良さの一つとして、コミケに出展するために作品を1つ書き上げる力量はなくても、1枚のイラストがあればグッズにして出展できるという点にある。

特にアクリルキーホルダーは、それ

まで紙に書いたイラストをラミネートでパウチしてキーホルダーにしていたものから発展したもの。データさえあれば、印刷会社へ渡すだけでよい手軽さと、小ロットで作れて、見栄えが良いことなどが重なりブームになった。そして大きなブームが去った今もアクリルキーホルダーは定着し、新しい人気作品が誕生するたびに当然のごとくアクリルキャラクターグッズが作られている。

そして最近では、企業や地方公共団体等からのアクリルキーホルダーの発注が増加している。企業や団体からの仕事は時に大きな受注になることから、本格的にBtoBに取り組もうと挑戦中だ。企業の需要には、コロナ禍前であれば、有名なアニメキャラクターと企業が連携して運営する“コラボカフェ”等で扱う期間限定のグッズなどの採用もあった。一方、コロナ禍で出てきたのが、原画展など飲食を伴わないイベントで販売するグッズの生産である。

なお昨年5月にはホームページをリニューアルし、サイト上にアップしているグッズの数は約550製品に上る。それでもなおかつ、毎週新商品を開発し続けている理由として、「欲しいグッズも多様化しています。飽きられないように新製品を増やす努力が必要です」

## 緑陽社が手がけるグッズ類の見本から



ホログラムアクリルキーホルダー



グリッターアクリルキーホルダー



がまぐち

コーヒー&紅茶のパッケージ

と加藤氏。実際、同人誌関係者以外からの問い合わせも増えており、販促品やイベント配布用、幼稚園や保育園の卒園記念といった定番の需要以外に、ホストクラブの誕生日イベント用グッズなど変わったものも製作している。

緑陽社は、もともと同人誌の世界に寄り添い、グッズの総合商社的な立ち位置で顧客の様々なニーズに応えてきた。40年間にわたり受け継いできた作り手が納得するものを作るという精神が、今も製造の現場を支えている。この理念の背景には、納品された品物は、作家にとっても、作品のファンにとっても宝物となるという意識がある。「同人誌の世界は作家本人が印刷発注者であることがほとんどですし、私達はお客様の宝物を印刷させて頂いています。お客様をがっかりさせるものづくりはできないという意識が社内でも共有されています」と鈴木氏は語っている。

最近ではアクリルキーホルダーを製造できる会社も増え、量産能力や価格だけで対抗することはできない。そこで、BtoBにもBtoCにも対応しつつ、Webを通じた全国集客もできる550商品を取りそろえた総合商社であると同時に、社内一貫製造のメーカーとして、また満足できる製品づくりを大切にしている会社として躍進していきたいと展望している。